



集落の話の聴き手だより

第15号

2024.12



今月は... 清水町



- ・あちこちで水が湧く清水のまち
- ・清水を詠った芭蕉の句の石碑が残る
- ・甲州街道と武州街道が交わり商店が賑わった

語り手

篠原 美恵子さん
高橋 フサコさん
高橋 夏生さん
高橋 早苗さん

畳屋以外は何でもあった 賑やかな清水町商店街

昭和40年代の清水町商店街の様子をフサコさんが地図にしてくださいました。お店は48軒あり、畳屋以外なんでもあった賑やかなまち並みが、地図からもうかがえます。大きな看板の下に隙間なくお店が並び、店の前に自転車やバイクが停められ、バスの往来もありました。夏生さんのご実家は、天神橋近くにある理容店です。その裏手には、『東信劇場』がありました。寒い日には、入り口に七輪の火鉢が用意され、炭代を払って火鉢にあたりながら、映画や芝居を観ました。人情劇が繰り広げられ、沢山のおひねりが飛んでいました。

外には絶えず流行歌が流れ、人々が行き交いとても賑やかで、ちんどん屋が練り歩いていたそうです。

商店街の中でも子どもたちに大人気だったのは、駄菓子屋の田中屋でした。青物市場も定期的に開かれ、川上村からもリヤカーを引いて野菜売りに来る人がいました。大橋布団店は嫁入り道具の布団で大繁盛、時代は真綿布団から羽毛布団へと変化していた頃でした。

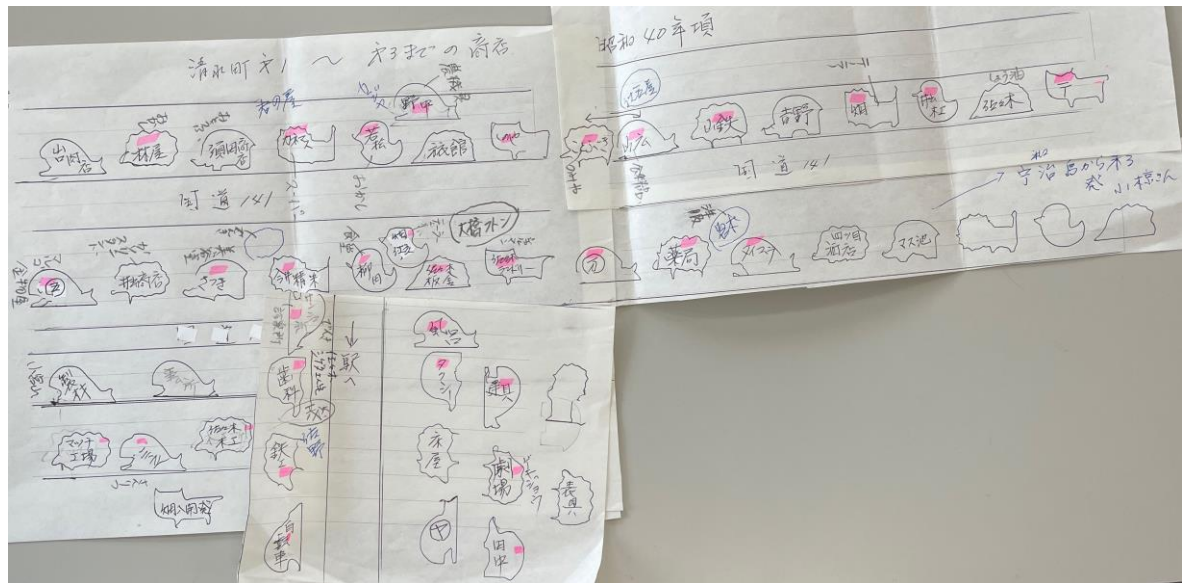
いま小林組があるところー帯は大きなマッチ工場でした。商店街の千代乃湯（清水町の人はいまーちゃんと呼んだ）には、工場で働く人たちが仕事の後にお風呂に入りに来たといひます。しかし、早苗さんが嫁ぐ頃にはもう各家庭に内風呂があり、お風呂屋さんはなくなっていたそうです。



お話を聴かせていただいたみなさん

最近まで商店街でしものや洋品店を営んでいた美恵子さんは、「百姓は、（仕事が大変で）やだかったから、店に嫁いだ。楽かと思ったら、お店も大変でした。」と話します。「当時、店には住み込みの従業員も多かったです。昼休みに休みたくても、姑がそうさせない（それくらい厳しかった）。今になっては、姑に色々教えてもらって、感謝しています。店を辞めてから10年になります。」
「田舎の店は、時間でやる訳じゃない、今から行っている、といつでも電話がかかってくる。洗濯物が乾かないから運動会に間に合わない、運動着を売ってくれ、と朝から電話がくることもあります。だから、店は休めないんです。」
「良かったことは、たくさんの人に来てもらったこと。お宅の品は、物が良いから、長持ちしている、と言われたこと。嬉しかったですね。店をしながら、畑もやりました。」

今でも、孫がショーウィンドウを拭いてくれます。だから、お店のガラスはピカピカ。」
その日、隣にいたフサコさんが偶然着ていたのも30年前にしのやで買った服でした。とても素敵な小花柄のブラウスです。地域の人から愛されたお店だということが伝わってきました。



高橋フサコさんの手書きの商店街の地図

一度飲んだら忘れられない 心沁みる豊富な清水

子どもの頃から聞かされた清水町ならではのお水にまつわる話があると教えてくださいました。

甲州の人が病の床で、息子に「死ぬ前にもう一度、清水町の水を飲みたい。」と言いました。息子は、知らずに小海町にある清水町の水を汲んで帰りましたが、父親はこの水ではない、と言います。父親の言う水は、もう1里先の清水町のものでした。息子は、再び水を汲みに行き今度はこの地の水を飲ませ、父親は大そう喜んだというお話です。

それだけ清水町の水は、特別な味がする硬い水だと夏生さんは言います。

早苗さんは清水町に嫁いで、水が豊富なことがありがたく感じた話します。野菜や花への水くれや、子どもたちの水遊びには、好きなだけ水が使えて1年中水に困りませんでした。

一昔前には裏に水車小屋が2軒ありました。水や水車の音が常にする環境なので、「車屋育ちは、声がでかいといわれたのよ。」と笑います。残念ながら水車小屋は、伊勢湾台風で流されて無くなってしまいました。

早苗さんの家の裏の川は、勢いよく水が湧き出て流れが強いので、川底には青々とした水草以外何もありません。その先には、八千穂漁業のいけすが広がっています。八千穂漁業は戦後、清水町には良い水が出ている、と聞きつけて、愛媛県宇和島からこちらへ来てマス池を始めました。ニジマスを出荷していましたが、感染症が発生し、ダイオウイワナ、ヤマメにシフトして今は信州サーモンを出しています。

澄んだ池には大きな魚が泳ぐ姿がくっきり見え、水の鮮度の良さが感じられました。冬は気温が低いので、水から湯気が



佐々木龍夫さん宅の芭蕉の石碑
「佐々礼蟬（さざれがに） 阿し者以の 本る清水可な 芭蕉」
沢蟹が葦の草を登る様子を詠った句
（龍夫さん解説）

女性たちの社交の場 十九夜さん



十九夜でお参りする石仏

清水町でもお彼岸になると年齢に関係なく女性だけが集まり、十九夜さんをするといひます。公民館の押入れには、江戸時代に作られたのか、“寛政十三年”と書かれた仏具入れが大切に保管されていました。その中にある、大玉のついた長さ5〜6メートルぐらいある大数珠と、如意輪観音の掛け軸、鐘を見せていただきました。

やり方も教わりました。丸く輪になってそれぞれが両手で数珠を持ち、お念仏を唱えながら鐘に合わせて回します。そして、大きな数珠玉が回ってきたら、頭につけます。それを何周も繰り返し、回した回数は、木札を使って数えます。お念仏が終わると、持ち寄ったごちそうを食べながらおしゃべりをします。女性たちの情報交換の場でもありました。フサコさんは「最初はやだだったけど、行く内に近所の人となりがわかり、こういうコミュニティの感じもいいなと思った。」という。

年季の入った大数珠はぴかぴかと光り、お香の香りがします。長年、女性たちの手を通じて願いが込められた、重みと歴史を感じます。掛け軸は清水町の表具屋で修理され、きれいに保存されています。何枚かある経文も、世代ごとに書き直しては、受け継がれています。

公民館の坂上には、十九夜さんの石仏が今も大事に祀られています。佐々木国子さんが小さな着物を作ってくれるお陰で、石像は絶えず綺麗に飾られています。

女性だけで厳かに続けられてきたお祀りが、今は無くなりつつあります。十九夜さんのように地域に根付く文化は、これからもぜひ残って欲しいとしみじみ思ひます。



仏具と掛け軸（写真中央上部）

聴き手	大波多 志保
	櫻井 麻美
文章	大波多 志保
編集	櫻井 麻美
	副島 優輔
デザイン	西澤 ユキ

花岡 と 人の暮らし



花岡に上る道は3本ある。旧八千穂村、黒澤酒造脇にあるマルト坂、茂来館に上る道を真っすぐ行く道、下海瀬から上る道である。河岸段丘の上に広がる花岡は崎田集落と隣り合わせである。

内藤善人さんはもうすぐ95歳になる。菊づくりから始まりカーネーション栽培まで続けてきた。それも数年前にやめ、現在は自家用野菜作りに精を出す。その他、イチジク、ミカン、メロン、ショウガ作りにも挑戦している。毎日畑に出るのが楽しいという。

「母親が早くに亡くなったので、親父が米作り、養蚕に忙しかった。家の手伝いをした覚えがない。遊んでばかりいた気がする。近くの川で魚取りをした。にがっぱや（ハヤの一種）、コイ、フナ、ドジョウをざるですくって捕った。貴重なたんぱく源だったな。夏は毎日くらい薬師寺の近くの泥の池で遊んだ。体中が泥だらけになったけど、楽しかった。崎田や下海瀬の子どもたちと、石の投げ合いもした。下海瀬の子どもたちには、『花岡の丘カジカ！』

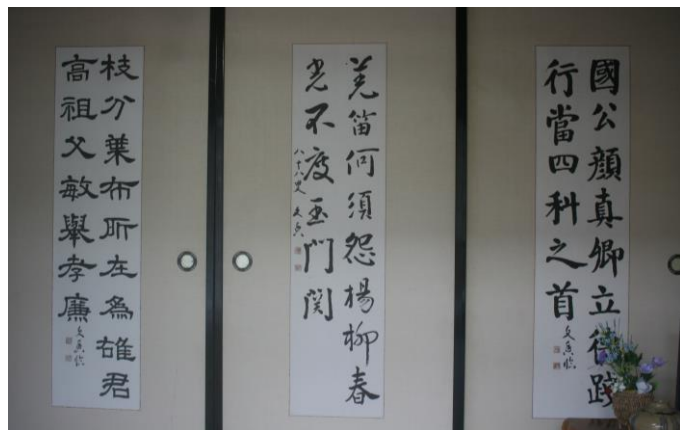
（花岡は水がなくて苦労していた時代でそれをからかった囃子言葉）と大声で叫んで石を投げてきた。水の苦労といえば、雨乞いをしに大人2人が双子池まで、お酒を持って行ったことがありました。それと、よく一人で山へ行きました。ウグイスの巣を見つけたこともありました。巣の中に緑色した卵があって、珍しいもんだから毎日観察しに行ったら、警戒されていなくなってしまった。」と善人さんは懐かしそうに、子ども時代の話聞かせてくれた。記憶が鮮明で、話し始めると、次から次に面白い話題が出てきた。「山の思い出では、秋の栗拾いとアケビ取りをしましたな。アケビの甘さは独特で美味しかったことを覚えております。今は山が荒れて、アケビはとれないかもしれないな。花岡遺跡公園のことを私らは城山と呼んでいました。そこで、戦争ごっこをしました。花岡は上と下に集落が分かれていたので、子ども同士で、別々に陣地を作って、戦いごっこをしました。陣地は枝を集めて作った小さな小屋でした。偵察に出て、敵と出会うとチャンバラごっこみたいなことをして遊びました。楽しかったな。」

善人さんは海瀬尋常小学校に入学し、途中で国民学校の名称に代わった小学校を卒業し、臼田の農産学校で3年間勉強をした。卒業して、父親の手伝いをした。「親父か

ら見たら遊んでいるみたいと思われたけど、一生懸命働いた。楽しかったのは、同じ年恰好の人たちと夜集まっては、農業の話をしてたこと。多い時には、10人くらい、少ない時は3、4人が集まって、菊づくりのやり方、病気の対処法、消毒の仕方など、研究会みたいなことをしてました。」

善人さんはどうしても話したいことがあると言い出した。「花岡は当時養蚕が盛んで、菊づくりをする人はいなかった。ちょうど、高度経済成長が始まる時に、2、3人の先輩たちが菊づくりを始めた。菊の値段が上がり始めたころです。普通は、お金になることは他人には教えず、めた自分だけのものにするんだけど、その人たちは他の人たちにも菊づくりを勧めたんです。それで親父も菊づくりを始めました。今の生活があるのはその先輩たちのおかげなんです。先見の明があったんでしょうな。」

善人さんの話は尽きない。今は畑に行くことが毎日の楽しみだと言い、家に帰ると読書をしている。難しい本を読んでいる。茂来館の図書館にはよく行く。今読んでいる本は『ノモンハン事件』についての本である。サリン事件やデカメロンも読んだと言います。「年を取ったら本を読まなきゃダメ。本を読めば、考えることがいっぱい出てくる。それが良いんだな。」向上心がありますねと言うと、「だれ、そんなことはねえ。親父は80歳くらいで書道の師範の免許を取った。」と教えてくれ、ふすまに張り付けた文夫（善人さんの父親）さんの書を見せてくれた。その書を見て、似たもの親子だなと思った。



文夫さんの書

小林武人さんは花岡の下に生まれ、育った。「海瀬国民学校に通ってたな。同級生が16人もいて、戦争中だったので、集団で登校していた。子どもの足だから30分以上かかって、学校へ行きました。小学生の頃はあまり家の手伝いをした覚えがない。中学生になって、家は蚕を飼っていたので、父親が桑の木に登って切り落とした枝葉を拾ってはリヤカーに積んだのは覚えている。年に2回蚕の繭を取った。同級生が大勢いたので、当時

流行っていた野球をみんなでやりました。グローブなんかないから、自分で手袋の大きいやつを編んだ。ボールは布、バットは木の枝。冬はスケートをその大きい池でやりました。下駄スケートでした。それから、『かがり』をやりました。『かがり』って知ってるかい。どんど焼きのことだよ。この辺りでは『かがり』と言うんだ。花岡は上と下に分かれていたから、どんど焼きのやぐらは2つ作った。子どもたち15人くらいで山に入って、太い木を切り出してくる。先輩の新津又衛さんがやぐらの組み方を指導してくれた。楽しかったな。」と、話してくれた。

「中学を卒業して、家が菊づくりをしていたので、その手伝いを始めました。父親が最初に菊づくりを始めました。当時はみんな蚕を飼って生業を立ててた時代で、花の値段も安かった頃です。父親は旧臼田町の青沼の生まれでした。青沼は菊づくりが盛んでしたから、花岡でもできると始めてたようです。花の値段が高くなり始めてから、花岡でも50軒くらいの農家が菊づくりを始めました。菊は露地栽培でしたが、ひょう害にあったので、ハウス栽培に切り替えました。ハウスの中での菊づくりは難しく、うまくいかなかった。それで、カーネーション栽培を始めました。体力があったころは、大きいハウス5棟でカーネーション栽培をしていましたが、今は2棟に減りました。息子が後をついで、やってくれているので、多少は楽になりました。」と、武人さんは話してくれた。



小林武人さん

土屋一芳さんは7人兄弟姉妹の長男として生まれた。父親は農業で暮らしを立てていた。冬場は土木工事現場で現金収入を得ていた。「遊んでいるっきりじゃいけないと思ったと思うよ。」と一芳さんは父親の思い出を語った。「学校から帰ると、家の手伝いをした。桑の葉をリヤカーに積んで、牛で運んだ記憶がある。年2回繭をとるんだけど、『かいこさまさま』だから、人間は隅っこで寝てた。海瀬国民学校の同級生は5、6人いた。学校へは明神坂（下海瀬から上がる坂のこと）を歩いて行くけれど、帰り道では、左側にお墓が



土屋一芳さん

並んでいて、暗いあの坂はやだかった。遊びで覚えているのはパッチンぐらいかな。あと、城山（現在の花岡遺跡公園）に登った。木が低くて見晴らしがよかった。そういえば、川でドジョウを捕ったこともある。水が少なかったから、ざるを下流において、足で追っかけるとドジョウがざるに上がった。きれいな水の中に入れて、泥を吐かせてから食べた。」

思い出は、中学生の頃、米一俵担いで崎田の精米所まで行ったことと、父親の言いつけで煙草を買いに行かされたこと、11月の御嶽神社の縁日で遊んだこと。臼田の農産学校を卒業した後は、家の農業を手伝った。土地改良が進み水路が通ると、花岡はそれまでの養蚕農家から米作り、菊作り農家変わった。父親の代から、菊づくりが始まり、集落全体の7割から8割の農家が菊作りをしたという。一芳さんは一家の長男として、本気になって菊作りに取り組んできた。しかし、菊づくりは自然災害に左右されることが多く、収入が安定しなかった。

「安定した収入を得るには、施設園芸のカーネーション栽培が最適だと考え、46歳の時思い切ってカーネーション農家に転換した。全くの素人だったので、カーネーション栽培をしている先輩に聞きながら始めた。それでもうまくいかないときは、先輩に聞いちゃやり、聞いちゃやりしながら今までやってきました。なんせどうしたら生活できるかばかり考えて暮らしてきました。ただ、花の値段は、相場で決まるので、農家としては計算ができないところが苦労です。でも生活はよくなった。水道が入り、水洗になり、一人一台の車が持てるそうゆう時代になりました。でも、今言えることは『人生平凡が一番』だということです。」



（文責 西村寛）

